俳句文学館

発行所
社団法人
俳人協会
東京都新宿区
百人町3—28—10
郵便番号160
電話（03）367—6621
（代）
発行人　草間　時彦
定価　100円（送料別）
（年　1,000円
送料　300円）
振替口座東京
6—273番

# 俳人協会 通常総会開かる

## 会員個々の立ち場を尊重した運営へ

## 新事業など可決

### 富安顧問ら物故者に黙悼

社団法人俳人協会の昭和五十三年度（第八回）通常総会は、二月二十四日（土）午後一時三十分から、東京・飯田橋のホテルグランドパレス三階松の間で開催された。

午前中の雨もやんで、雲間に日ざしの感じられる昼過ぎ、定刻に近づくと出席予定の会員が三々五々と会場に集まり、百数十名の出席数をかぞえてから総会に入った。

俳人協会第八回通常総会の会場風景

大野会長から賞状を受ける協会賞受賞の殿村さん

皆川盤水幹事の司会により、有効委任状三七二〇通と出席者百八十八名によって本総会の成立が宣言された。

冒頭、二月二十三日逝去された富安風生顧問、また二月三日逝去された細木芒角星監事およびこの年間に逝去された会員のみなさんにたいし、黙悼が捧げられた。

つづいて安住敦副会長から、俳人協会旧事務所時代に富安風生顧問が俳句文学館建設の基金をみずから持参されたことなど、心暖まる追悼のことばが述べられた。

定款第七章第二十条に基づき大野林火会長が議長席に着席され、西山誠、宮岡計次両氏を議事録署名人とする同意を得てから議案審議に移った。草間時彦理事長から一般報告があり、年間新会員五三四名、逝去者五十七名、退会者六十一名、現在会員数五、〇九〇名と報告された。

第一号議案「昭和五十三年度事業報告および決算」は有働亨理事、松崎鉄之介理事からそれぞれ説明があり、質疑ののち承認および可決された。

第二号議案「昭和五十四年度事業計画案および予算案」は草間時彦理事長から概要説明があり、沢木欣一理事（俳句文学館紀要）、原裕理事（現代俳句選集第六集）森田峠理事（関西支部）とそれぞれ担当別の補足説明があり、続いて松崎鉄之介理事から予算案の説明があった。とくに各地会員の集い、脚註名句シリーズの刊行、会員手帳（仮称）の配布、俳句文学館紀要の刊行など新規事業が強調され、全国俳句大会、関西俳句大会、各種講座、自註シリーズの継続刊、俳句カレンダー、老人俳句普及句会、教師のための俳句研修会などもいよいよ充実されていく。質疑ののち承認および可決された。

新人賞の大串（左）、鈴木両氏

第三号議案「定款変更に関する件」は鷹羽狩行理事から説明があり、五、〇〇〇名を越した本会にふさわしくするため、総会の定足数などの改訂案であることが述べられ、質疑ののち承認および可決された。

追加となった第四号議案「監事一名補充選任」は、大野林火議長みずから議長一任をとりつけ、「馬酔木」同人の大島民郎氏を新監事として提案、満場一致で同氏が監事に就任した。同氏から挨拶があって、議事のすべてが終了した。

最後に村山古郷理事から細木芒角星監事追悼のことばが述べられ、第一部はとどこおりなく終了した。

## 協会賞新人賞受賞者に賞状賞品の授与も

引き続き第二部ともいうべき、第一八回俳人協会賞、第一回俳人協会新人賞授与式は司会を山崎ひさを幹事に交替して続行された。大野林火会長から協会賞殿村菟絲子氏、同新人賞大串章、鈴木栄子両氏と順次、賞状、賞品授与があり、所属結社からそれぞれに花束が贈られた。審査員を代表して協会賞には野沢節子氏がたたれ、『晩緑』は著者の本音の出た句集、同新人賞には千代田葛彦氏がたたれ、『鳥獣戯画』の自由な発想、『朝の舟』のういういしい抒情性などその特色が指摘され、今後の活躍を期して待ちたいと結ばれた。

受賞の三氏からもそれぞれ謝辞があって午後三時四十五分予定どおり授与式を終了した。

四時からは別室において懇親会に移り成瀬桜桃子幹事の司会により、福田蓼汀理事の挨拶、西村公鳳評議員の乾杯によって、にぎやかなパーティーが開始された。

（岡田　日郎記）

## 四月集

修二会の太格子　大橋　敦子（吹田）
水取や良弁の名に杉椿
網膜に遺り修二会の太格子
涅槃図を拝すも隔つ太格子

櫻貝　西谷　孝（長崎）
復活祭目覚めたまはる日の恩寵（グヮッサ）
十字架凧あげ隠れなきゼンチョ村
櫻貝日なき海より打ちあげて

灌仏　本多　静江（福井）
霧吹きて花もち直し花御堂
灌仏へ午後片休み菅藻掻
死なば吾ももらふ釈の名甘茶受く

春隣　木附沢麦青（青森）
切株がひとつ雪間に慈父のごと
山に向く戸口に父や春隣
春立てり三人の子のじゃんけんぽん

雛　谷口　秋郷（東京）
あおぞらにのこれる雨や雛の市
雛飾る店ありてわが夜々の帰路
出漁夫睡り足らへり雛の間に

## 冬秋夏春

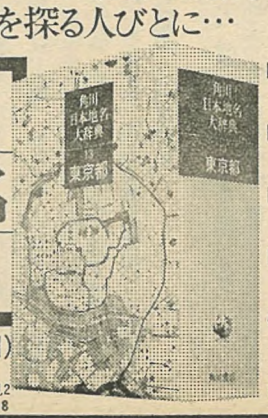
富安風生先生の葬儀から五日程経ったある晩、山口青邨先生の御宅に伺った。思い出したように寒くなり、雨も降っていた。「夏草」の仕事の打ち合わせなど終え、私は話を風生先生のことに移していった。雑草園の庭は真闇。▼——風生先生が亡くなられてもうすぐひと月経ちます——「そう親しい友人を亡くしました」——葬儀ではずっとお立ちで御挨拶されていましたが——「六十年近い間の親しい友人としての最後の務めでしたから、それに私は元気だし、案外足は強いんです。あの位の時間は何でもない」——語りかけてくるような遺影、何とも言えずよいお顔だと思いました——「あの人はずっと変わりませんでしたね、私とは大正十一年、東大俳句会（現在草樹会）が出来たとき、初めて知り合ったのですが、それ以来変わりませんね、洗練された紳士だった。神経が細かく、細心で誠実だった、それに鋭かった」ここで当時の話となる。▼「私はみちのくの田舎者、風生や秋桜子は洗練された都会人、ホトトギスの句評会やいろんな会合で、私は思ったことをズバズバ言う、風生は喋り方もスマートで、鋭いが柔らかい、議論に熱が入ると私は一層直情的、そこで風生などは青邨がトサカを立てたと言ってよくからかった」——よくお集りだったのでしょう——「そう、でもあの人は役人だったから時間に縛られる。秋桜子や私はある程度時間が自由、やりくり出来たが、風生はふだんの日の句会や文章会などにはいつもというわけにはいかなかった。武蔵野探勝会などは日曜日だから、毎回出て来た。それは熱心だったですよ、俳句が好きだった。秋桜子などは、俳句の好きなことでは風生が一番と言っている」風生先生を語るとき、必ず秋桜子先生の話が一緒に出てくる。▼——風生先生とは七つ違いですね——「あの人を私はずっと風生と呼んでいました。私より七つ年上ですがね、どうも風生さんとか、風生君とか、そんな呼び方はぴったりとしない。やはり風生と呼ぶのが一番よかった。最も自然だった。親しい兄貴という気持ちなんですね、それだけ親しく、お互に信頼しあったんですね」——先生が八十歳を迎えたとき、風生先生は喜ばれ、青邨も八十になった、これで私と近い年齢になった、年寄りになった、愉快だと面白がっておられましたが——「ときどきそんなことを言って面白がった。自由に物を言っていましたね、私は違和感という言葉を風生の話から覚えた。どうも体の調子がどこかしっくりいかないんだよ。君も九十にならないとこんなことはわからないよ、と自慢とも憐憫ともつかないことを言っていましたがね、あまり老いぞ老いなんて言うから、私は逆に「不老」という題を句集につけた、これは冗談」▼最後は師弟の話になった。「風生は虚子先生の許で身につけたものを最後まで忠実に守った。そのことで風生自身の個性もまた磨かれていった。退官してからの四十年、体は丈夫とは言えない人だったが、無理をせず、謙虚に生き続けましたね、芯だけは強かった」山本健吉氏が冠した「艶」も「軽みの人」なる言葉も、一生を貫いた強靭な作家精神に支えられた人の生きざまにあったことを改めて強く感じたのだった。十時、雑草園を辞した。雨は上っていた。青邨先生は、門まで私を送って下さった。沈丁の香の濃い角を曲ったとき、ギボッシュと雑草園の門を閉ざす音が聞えた。

（斉藤　夏風）

水原秋櫻子全集
講談社版　全二十一巻
好評発売中
定価各巻 2,900円

第一巻　句集一☆
第二巻　句集二☆
第三巻　句集三☆
第四巻　句集四☆
第五巻　句集五
第六巻　俳論☆
第七巻　作家論
第八巻　日記
第九巻　鑑賞一☆
第十巻　鑑賞二☆
第十一巻　鑑賞三
第十二巻　芸術論☆
第十三巻　自句自解
第十四巻　入門・吟行・添削☆
第十五巻　俳句作法☆
第十六巻　随筆一
第十七巻　随筆二
第十八巻　紀行☆
第十九巻　自伝回想☆
第二十巻　古典研究一☆
第二十一巻　古典研究二・雑纂
（☆印は既刊）
講談社

ふるさとを愛する人びとに、歴史を旅する人びとに…
日本の風土と文化を探る人びとに…
角川日本地名大辞典
県別47巻・別巻（総索引）



■豊富な地名——全50万項目に及ぶ画期的項目数！
■引きやすさ——小項目主義による五十音順配列！
■充実した解説——2千名をこえる研究者を総動員！
■広い読者層——家庭・学校・職場に必備の辞典！
●第1回配本　⑬東京都 53年12月1日
発売記念特価 5,800円
（特価期限　昭和54年12月末日まで）
1400頁・カラー口絵16頁本文図版多数
角川書店　東京都千代田区富士見2
振替東京3—195208

# 村山古郷氏 芸術選奨に輝く

村山　古郷氏

演劇、映画、音楽、大衆芸能などの各分野で、昨年一年間に優れた業績をあげた人たちに贈られる五十三年度（第二十九回）の芸術選奨文部大臣賞に、村山古郷氏が選ばれた。

昨年九月に角川書店より出版された「明治俳壇史」が「評論等」の部門で高く評価されたものである。

村山氏は、俳人協会理事・鶴同人・神奈川県大磯町鴫立庵主等さまざまな分野で活躍しておられる。

俳句文学館へも図書委員会の副委員長として、週に二日（月・金）元気なお顔を見せられて、意欲的に図書その他の雑務を消化しておられる。

## 第五回南日本出版文化賞
## 辺見京子句集「黒薩摩」に

辺見京子句集「黒薩摩」に、このほど第五回南日本出版文化賞が贈られた。

南日本出版文化賞は鹿児島県内在住者の五十三年中に出版された、あらゆる文化的な図書を対象として、地域社会の発展と地方文化の向上に尽力した初版刊行物に贈られる賞であり、今回は小説などを初めとする二十篇の応募図書の中から選ばれたものである。なお短詩形の俳句、短歌としては初めての受賞だけに、その道にたずさわる者にとって、誠に意義深く、快挙ともいえる慶事であった。

選考委員は五代夏夫（作家）、新納教義（県教育委員）、川村純二（鹿児島市立美術館長）、川越政則（南日本新聞社社長）の四氏で、贈賞式は三月一日南日本新聞社で行なわれた。

「黒薩摩」は第十五回角川賞を受賞した「雷屋の眼」を中心とする、氏の第一句集で、先に行なわれた、俳人協会賞の最終予選に残り、惜しくも洩れたが、その作風はおおらかにして格調高く、特に風土を詠んで秀れた作品が多い。

（大岳水一路）

## 佐々木菁子氏に福岡市文学賞

佐々木　氏

震母の同人である佐々木菁子氏（七〇歳）が、このほど福岡市文学賞を受けられた。

本年で九年目となるこの賞は、芸術文化の振興に寄与された作家に与えられるもので、俳句の部門においての受賞である。

氏は昨年五月牧羊社より、「句集・千手」を出版され、これが審査対象作品となったものである。

三月二十一日福岡・西鉄グランドホテルで表彰式が行なわれた。

## 自註現代俳句シリーズ
## 第I期完結近し

『岸風三楼集』が去る二月刊行され、残る二冊の山口青邨、山口誓子両先生の自註集は、すでに原稿をいただいて製版中。これで、第1期全三十冊が完結する。

山口青邨集　四月下旬刊
山口誓子集　五月下旬刊

## 故秋元氏の蔵書
## 残り分を受贈

三月三日おひな祭りの日に、故秋元不死男先生の蔵書が、阿部夫人より俳句文学館へ寄贈された。

以前にも二、〇〇〇冊程度の寄贈をしていただいていたが、まだ少し残っていたとのことで、今回は二七三冊で、石田波郷の「風切以後」の句集等一〇四冊が今まで俳句文学館にはないものであった。また最近、尾高賞とサントリー音楽賞を受賞した作曲家の松村禎三氏の句集も含まれており、秋元先生が、亡くなられる年の二月に書いておられる序など、興味深いものではないかと思われる。

## 図書寄贈者

（昭54・2・1～3・15　敬称略）

白岩三郎　松井立浪　北荒星　有恒倶楽部俳句同好会　宮本いたる　南雲愁子　神谷紘子　ふなっこ句会　滝仙杖　曽根冬郊　横山勉　橋田一青　大平杜景　榛谷美枝子　小沢三楼　講談社　伊東放春　小林文夫　関根青虹　安住敦　中西幸造　松山市教育委員会　瓜生和子　阿部完市　岸美江　船津洪二　近藤良一　甲田鐘一路　大橋一葉　すその俳句会　黒川巳喜　松井百枝　日高町俳句連盟　青雲社　西本瑛夫　河原発行所　今牧茘枝　山口翠村　堀川自更　広岡司村　佐藤史郎　森本義雄　高木一郎　森田公司　平野秀穂　星野松路　土岐貞子　上田櫂三　石井庄司　宮井港青　木下清史　小島千架子　村田脩

## 大串章

# 優しさの中に爽かさ

（21）

浜の同人会のあとの酒宴で、彼は佐賀の民謡を唄った。「岳（だけ）のしん太郎」という。山に棲むしん太郎さんが山を下るときは燈籠をつけて迎えよう、帰るときは坂道に水を掛け、なめらかにして帰るのを遅らせよう、といったなんとも優しみのこもる唄だった。彼の唄いぶりも優しさが籠っていて好評だった。それをおふくろから習ったというのがまたよい。

彼は佐賀県嬉野の出身である。いでゆの町で知られる嬉野の地名の由来は、朝鮮の役で負傷して帰った兵たちがこの湯で傷を癒し、その侍大将が「うれしいのう」とところから喜んだ言葉によるという。これは彼から聞いたのだが、これを語ったときの彼の優しさに溢れた表情は忘れ難い。

彼の句集『朝の舟』は〈人望郷〉という主題で貫かれているがそれを支えるものはこうした優しさにちがいない。また彼と接した誰もが彼の爽かな人柄の印象を語るがそれもこうした優しさに触れるからであろう。快活だが上すべりでなく、人の話をよく聞くが安易な妥協はしない、いつも気持が平らかでいて内に強い核を持つ好青年の印象はいまも変わらない。その彼も不惑を迎えた。大企業の第一線課長の激職をこなしながら、いつ読むのか古典への一家言も育てており、話の端々に日頃の読書家ぶりが窺える。まことに頼母しい作家といってよい。清潔でみづみづしい詩情をもつ資質とこの研さんこそ彼の大成を約束するものであろう。

（中戸川朝人）

（写真・岸田　稚魚）

## 新季題「散歩」

明治のころ、秋声会の尾崎紅葉一派が「散歩」を新季題として句を作っている。明治三十三年四月十八日の読売新聞紙上に掲載され、雑誌「太陽」明治三十三年五月一日号にも転載されている。

ただし「散歩」がいつの季題であるかは明記されていない。この句が発表されたのは春であるから、春の季題としたのかも知れぬが、新季題として提唱しながら、当季を定めないのは、いささか手抜かりである。

その句は次の通りである。

海見えて真砂路遠き散歩かな　紅葉
乳母車父が散歩に行逢へり　小波
停車場に待つや散歩の方二町　紅葉
姉いもと手糸あみつつ散歩かな　秋月
たそがれを閉戸先生の散歩かな　冬湖
胃を病める厲吏久しき散歩哉　紫明
明星に土曜日暮るゝ散歩哉　活東
一歩二歩おくれて妻の散歩哉　小波

いずれも秋声会の作者であるがその中の冬湖は紅葉の別号で、久保柳葉編「紅葉句集」には、右の散歩二句を、雑の部に取めている。

散歩という季題はその時だけで、その後流行を見るに至らなかったので、雑に収めたのであろう。

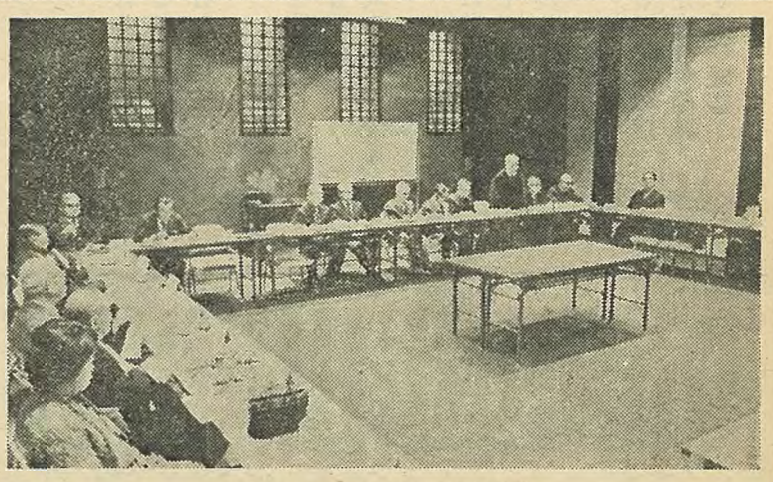
（古）

## 俳壇ことばれ話

### 「自鳴鐘」は「とけい」

俳誌「自鳴鐘」は一般に「じめいしょう」といっている。しかし当初はこれを「とけい」と読ませるつもりであったらしく、当館所蔵の第二号（昭和十二年二月号）の表紙裏に貼付された広告用紙および同号の横山白虹氏選雑誌欄のカットに、明らかに「とけい」とルビが振られている。「自鳴鐘」を「とけい」と読ませる筈であったが、世人多くは「じめいしょう」と読みならわし、これが定説となったのであろうか。

（古）


活発に話し合われた評議員懇談会

# 活発に意見を交換して
## 俳人協会評議員会開く

二月二十三日、俳人協会評議員懇談会が、俳句文学館で開催された。

出席者は十九名、それに大野会長以下各理事も出席し、俳人協会の業務などについて活発な意見の交換があった。

出席者は次の通りである。

石井桐陰・石原舟月・大竹孤悠・亀井絲游・木村蕪城・京極杜藻・近藤一鴻・篠田悌二郎・柴田白葉女・滝春一・堤俳一佳・徳永山冬子・殿村菟絲子・西本一都・野竹雨城・堀喬人・松野加寿女・三浦恒礼子・山本古瓢・大野林火・安住敦・皆吉爽雨・草間時彦・沢木欣一・松崎鉄之介・原裕・村山古郷・宮下翠舟・小山田抒雨

## 大島民郎氏を監事に選任

大島　民郎氏

俳人協会では逝去された細木芒角星監事の後任として大島民郎氏を総会において、監事として選任した。

大島民郎氏は大正十年生れ、慶応大学在学中より水原秋桜子に師事、現在「馬酔木」同人である。

奈良市に居住、住友銀行の支店長を経て、現在住友病院事務長。経理のベテランとして、俳人協会業務のよき助言者となることが期待されている。

◇　◇　◇


## 自註現代俳句シリーズ

第II期　四十冊

既刊（五十音順）　井沢正江集・石原舟月集・遠藤梧逸集・及川貞集・大橋敦子集・岡田日郎集・桂樟蹊子集・亀井糸游集・小林康治集・斎藤玄集・下村梅子集・田村了咲集・高木晴子集・龍岡晋集・西村公鳳集・西本一都集・野見山ひふみ集・星野立子集・星野麦丘人集・松崎鉄之介集・松村蒼石集・村越化石集・山田みづえ集

続刊（五十音順）　安住敦集・右城暮石集・小原菁々子集・岡本眸集・加倉井秋を集・北野民夫集・沢木欣一集・草浦あや集・進藤一考集・鈴木真砂女集・千代田葛彦集・徳永山冬子集・中山純子集・能村登四郎集・古館曹人集・堀口星眠集・山口波津女集

装本、編集などすべて第I期に準じます
昭和五十三年七月発売以後　毎月三冊の予定にて刊行
一冊　八八〇円（送料一二〇円）
全四十冊一括申し込みの場合　三万円（送料共）
一万五千円ずつ二回分割支払をご利用下さい

〒160　東京都新宿区百人町三―二八―一〇
申込先　社団法人　俳人協会
電話　〇三（三六七）六六二一番
振替　東京　六―二七三番



延二〇〇余名の代表作が一堂に
全俳人・文筆者に待望の必読書
俳人協会編

## 四季随筆（春）

B6判／定価1,500円

■何回読んでも良い作品、或は読みたくともどこにあるかわからなかった名編の数々……。俳人協会に結集する多彩な現代俳壇の中心メンバーの力作を網羅し、春・夏・秋・冬に分類して刊行

●家作録収（春）筆随季四●

早春
水原秋櫻子　安住敦　阿波野青畝　星野立子　岸田稚魚　上田五千石　斎藤茶輔　皆吉爽雨　渡辺千枝子　古舘曹人　勝又一透

伸春
山口誓子　石川桂郎　原コウ子　岡本眸　加倉井秋を　橋本美代子　大橋敦子　土岐錬太郎　能村登四郎　古賀まり子　鳥羽とほる　堀口星眠　相馬遷子　五所平之助　山口青邨

暁春
角川源義　石田波郷　岸風三楼　清崎敏郎　小林清之介　稲垣きくの　木村蕪城　大場美夜子　石井桐陰　鳥越すみこ　中村汀女　細見綾子　中村草田男　大野林火　富安風生　水原秋櫻子

東京美術
東京都千代田区神田司町2―7
振替／東京3―13186
電話／（03）292―3231

# 富安風生顧問逝く

享年九十五

俳人協会顧問富安風生先生は二月二十二日、逝去されました。数え年九十五歳。睡るように安らかに逝かれました。ここに、謹んで哀悼の意を表します。

翌二十三日、お通夜、二十四日にご自宅で密葬が行われました。

当日はたまたま、俳人協会総会の日でした。本葬は三月七日青山葬儀所で、当協会名誉会長水原秋桜子先生が葬儀委員長として、神式で挙行されました。

ただ今、黙祷を捧げて目をつぶりました私の眼裏にふと浮かんだあるときの風生先生のお姿があります。それは俳人協会がまだ新橋鳥森の雑踏の中の、それはもう今の俳句文学館などとは比べものにならない古びた雑居ビルの四階に事務所を借りていた頃のことです。ある日、そのビルの、これまたまことに感度のにぶいカタカタのエレベーターの扉が開くと、そこに風生先生の姿がありました。風生先生は、当時私たちのやっておりました俳句文学館建設のための募金運動に対し、会長の水原秋桜子先生と共に率先ご協力して下さいましたが、その日は先生ご自身の醵金をわざわざご持参下さったのでした。わたくしたちは大変恐縮してそのずしりと重い札束をおしいただいたものでした。私は風生先生というとます文学館への絶大なご協力を思わないではいられません。

俳人協会が社団法人として新発足したのは、先に任意団体としての協会設立後十年、昭和四六年一二月のことでした。協会の法人化と同時に私たちは故角川源義さんを委員長として、かねて懸案の俳句資料センター、つまり今の俳句文学館建設の第一歩をふみ出しました。その文学館が竣工したのはご案内の通り三年前の昭和五一年三月のことですが、その間五年間にわたって陰に陽にこの文学館建設の大きな力となっていただいたのは他ならぬ富安風生先生その人でした。何しろ私たちとしては、さし当って委員長の角川さんから建設用地としてその私有地を提供してもらうことと、会員の皆さんに応分の寄付を仰ぐということのほか確たる目算があったわけではありません。もとよりそれだけで出来るはずはないので、まず国からの補助を受けなければならない、各団体からの助成金を貰わなければならない、財界からの寄付も集めなければならない。そんなとき私たちとして何かというと頼りにするのは風生先生でした。そういう場合、風生先生はいつも、自分は顧問に過ぎないのだからと、常に水原会長を先頭にお立てになって、あるときは時の総理に会いに国会に、あるときは時の会長に会いに経団連にと行って下さいました。そんなとき私たちはただもう後についていくだけ、またそれよりほか何の力もありません。しかし風生先生にはその力があった。先生はときに私たちをそんなことではいけないと叱咤し、ときに私たちを何をしているのだと激励して、つねに卒先して文学館建設の采配を振って下さった。私たちも何かというと風生先生に縋りました。私などは若輩の同人の方から余り老先生を酷使しないで欲しいと苦情を持ちこまれたものでした。

しかし、お陰様で私たちの俳句文学館はその後迂余曲折を経て現在の地に建設されました。もちろんこれには建設委員長たる角川さんの献身、またその衝に当った理事の方々の骨折会員の方々のご協力に負うところは大きい。それにも拘わらず、私はあえて、もし風生先生なくば文学館建設はあのように順調にはいかなかっただろうと、断言します。

ここに謹んで風生先生の御逝去を悼むと共に、心から御礼申しあげるものであります。

しかし、ここで私が、風生先生の逝去を悼むに当って、俳句文学館のことだけ言ったのでは一面的に過ぎるかと思います。俳人としての富安風生について論じるのには私はその任ではありません。私などがあれこれ論じるより、それは残された数多い作品が語ってくれると思います。もともと軽妙洒脱は風生俳句の一特長でありますが、その房州旅聞のころからそれは次第に人生的な色合を濃くし、その詠風は次第に自在となっていきます。また山中湖畔吟が示すように凄冷とした格調をもって自然に参入します。さらに晩年の作に到っては全く融通無碍の境地を開かれたことはご承知の通りです。

まこと先生こそは類まれな天寿を全うすることによって自らの俳句を完成したと言ってよく、かかる作家の在り方は前代未聞と言っていいかも知れません。

先生は一昨日二月二日午後、多くの門葉に囲まれて逝きました。昨日は通夜、本日丁度この時刻密葬が行われています。本席に「若葉」の方々の姿が少ないのはそのせいですが、日頃協会びいきの風生先生のことゆえ、私たちが、たまたまその日時を同じくすることになったこの通常総会でこうして一堂に会しているのを、ほうほうやっているなどごらんになっているかも知れません。謹んで先生のご冥福を祈るものです。

## 協会における追悼の言葉

安住敦

## 弔辞

水原秋桜子

かへりゆく
雁に先立ち
たまひけり

今年の春はあたたかくて、冴え返ることもなく、やがて帰雁の頃かと考へて居たところ、思ひもよらず風生さんが、その雁に先立って天へ帰ってしまはれた。むかし東大俳句会初期の頃、よく手賀沼へ吟行に出かけたが、すっかり暮れてしまった畦道を辿りつつ、いくたびか聞いた哀しい帰雁の声が、また耳によみがへるやうである。思へば東大俳句会結成以来六十年、会員の中の古参のものは、少しも中絶することなく長い交ぼりをつづけて来た。当時の句会は、一人々々思ふがままの句を詠み、思ふがままに批評し合って、少しも乱れることはなかった。実にきびしい修業とも言へるし、同時に楽しい遊びとも言へるのであったが、こういふ境に達することの出来たのは、風生さんの如く寛厚で最も俳句を愛する人を最年長者にいただいていたからであらう。実際、俳句を愛する点で、この人の上に出る人は今までにもなかったし、今後も現れることはないと思ふが、その風生さんとも終にわかれる時が来てしまったのである。たぐひ稀な天寿を完うされたのだから、あきらめねばならぬことだが、あの日以来、私は支へを失ってしまった心の空虚を、いかんともすることが出来ない。

昨年、角川書店の「俳句」新年号に掲載するため、風生、青畝、と私の三人が座談会をしたことがあるが、それが終ったのち、風生さんが、めづらしく自分の到り得た句境について、自信に満ちた言葉を述べた。修業もここまで来て、やっと目指していた句が出来るやうになった——といふのである。言ひ方はいつもの通り謙遜であったが、小ゆるぎもせぬ自信に裏付けられているやうであった。その句境は、その後誰もが認めて、俳句では拓き得なかった老境がひらけたものと敬服している。風生さんとしても会心のことであったにちがひない。

風生さんの頭のよさは、学生時代から定評のあったものだそうだが、それは官界に入ってからますます冴え、老いてもまったく衰へることがなかった。それゆえ、俳人協会が法人組織に移って行く頃、私達は風生さんの説明を全面的に信じて、あとに従うことが出来た。風生さんは、表面に立つことを全くしなかったけれど、あの時の功績は決して忘れることが出来ないと思ふ。

風生さんは「若葉」という大雑誌によって、門下を養成して来た。すぐれた作者の多いことだから、その俳句観や作風は、いささかの間違へもなく受け継がれ、長く俳壇に輝くことであらふ。

これより後は心しづかに天上の音楽をきき、作句をたのしみたまへと祈る。

## 文学館建設と富安先生

宮下翠舟

富安風生先生が亡くなられて、身辺に大きな穴があいた思いが深い。私が「若葉」に入門し親しくご指導を受けるようになって三十五年、あまりに身近にいた故か、三月七日のご葬儀を終えたいまも艸魚洞（池袋のお宅）に伺えば、あの優しいまなざしで、やあと迎えて下さるような気がしてならない……。

思い出をということで、やはりここでは俳人協会に関連した二、三について綴ることにしたい。

俳人協会が創立十周年記念事業として俳句文学館を建設しようと提唱されたとき、風生先生は初め批判的であった。というのは、建設までの問題もあるが、完成後の運営に対する懸念からであった。

しかし、事が決定してからの先生は積極的に協力された。時の政府要人、財界への援助要請など、常に率先して事に当ったのは周知の通りであった。そして、用地問題が解決し建設工事が始まった折も折、オイルショックによる物価高騰でさらに自己資金七、七〇〇万円調達という事態に直面したときである。その七月「若葉」は五〇号記念大会を箱根芦の湖ホテルで催した。席上「若葉」に課せられた負担額達成の協力を担当幹事が要請したあとに立った先生は、いま俳句にゆかりのあるものが、後世に遺産として残すべき俳句文学館の建設を立派に完成させることは、われわれの責任だと思うとも多いのだが、すぐ協会の引で洩れなく配布した。染筆点数は一〇九七点、そのうち七〇点は先生の染筆であった。

五十年年末に俳句文学館完成、翌年二月、私はその事務局に勤めることになった。それからは以前に増して艸魚洞を訪う機会が多くなった。私は「若葉」の同人会幹事長である関係上、その用務で伺いつも身辺から離さず、気分のよい日には染筆や原稿の約束を果されていた。

一月十五日艸魚洞に参上した。いつものように玄関で奥様にお目にかかり、用件を述べ伝言を願って帰ろうとすると、先生は丁度床を離れて食事のあと机に凭って新聞などに目を通しておられたときで、上れといわれる。しかし面談をしたあとはお疲れが出ると判っているので辞退すると、今日はとても機嫌がいいのですよと奥様が強っていわれるので、久し振りにお目にかかる。話はやはり協会のことになり、余り無理をするなと私の健康のことにまで気を配られて言葉もない。辞去しようとすると、まだいいだろうとはなさない。結局五分のつもりが大分延びてしまった。今度はいつ来てくれる？　といわれる。こみあげる思いを抑えて、近いうち必ず来ますと申しあげるのがやっとのことで、これが生前お話の出来た最後になってしまった。

うと縷縷言葉を尽して述べられた。（協会報六四号—五十年九月—に全文掲載）これが起爆剤となって協会さん下各結社の協力機運も高まり、程なく予定額を突破出来たことは喜ばしいことであった。

「若葉」では、この基金募集の手段として全同人の無償拠出による色紙短冊の染筆を、拠金者に籤

話になり、それも極って運営はうまく行っているかを尋ねられるのが常であった。

先生は昨年の九月二十二日、山中湖畔山荘で軽い発作で倒れてから、ご気分の勝れぬ日が多くなった。年末恒例の安房鴨川迎年行、つづいての避寒行も主治医からストップがかかっていた。そうした中でも作句意欲は旺盛で、句帳は

---

## 福岡県会員の集い俳句会

日時　六月十七日（日）十三時（受付十二時より）
会場　北九州市八幡東区中央町二丁目一—一　北九州勤労者会館四階大ホール
句会　当季雑詠二句持寄り
選者　福田蓼汀・宮下翠舟・他地元選者
賞　選者賞及び互選高点賞
懇親会　同館にて十七時三十分より　会費三、〇〇〇円
参加申込　五月末日まで。同封葉書にて左記へ　811—42福岡県遠賀郡岡垣町大字高倉　一—二五　岸原清行
会場への交通　鹿児島本線八幡駅下車。駅前より西鉄電車小倉または吉畑方面行にて中央町下車（徒歩二分）「タクシー八幡駅前より約五分」
実行委員長・小原青々子
事務局　児玉南草
主催・社団法人　俳人協会

## 北海道懇親俳句大会と講演会

日時　昭和54年5月26日（土曜日）午後一時より五時。（受付午前十一時より始めます）
会場　札幌市教育文化会館（電話271—五八二一番）　札幌市中央区北一条西十三丁目
会費　無料（ただし写真代実費八百円をいただきます）
投句料　三句　千円
送付先　「俳人協会北海道懇親俳句大会事務局」　060札幌市中央区南29条西9丁目　郵政宿舎三四三号（源方）
締切　昭和54年4月20日必着厳守
講師　沢木欣一、野沢節子
選者（順不同）　沢木欣一・野沢節子・宮下翠舟・斎藤玄・北光星・岡沢康司・山岸巨狼・新朗紫朗・勝又木風雨・阿部青月・横谷美枝子・平井さち子・飯島爻魚子・永田耕一郎

# さくら・ずいひつ

## 造幣局の桜について

今岡　碧露

水都大阪で知られた所に昨年また川崎橋が新らしく架けられた。これでさらに造幣局の桜も一層華かな様相が遠くからも眺められる。ここの桜は古く全国から寄せられた里桜の品種で、現在八十七種に及び、四百四十五本と成った。この八十七種にはそれぞれ、東錦、うとん桜、かんざし桜、黄桜、菊桜、松月、普賢桜、緋桜、楊貴妃などと言ったその花にふさわしい名称があるが、ほとんどは八重が多いが、早咲の染井吉野などもある。

都塵の真ン中にかかる桜を見られるのはここだけで古い歴史を持つ桜の名所と言えよう。造幣局の東側を流れる淀川は花や大阪城を映して昼夜を静かに中の島へ流れる。大都市の中にかく美と情趣を漂よはせている様は全く他に見られない眺めでもある。

この桜がかく他の名所桜と異ると言ふので、記録に依ると明治十六年初めて「桜の通り抜け」と言う名のもとに一般の者に公開され、天満橋北詰を入口とし、順序よく両側の花を賞でながら北の桜の宮橋の出口まで北へ北へと通り抜ける、この全長が五百六十㍍で、それ以来昨年で九十一回を重ねている。そしてこれを記念するため毎年花に因んだ〇〇桜と名称を付した記念メダルを作製発売される。

またこの桜の通り抜けには、前夜祭、特別観桜会、観桜会と三つの催しがあり、抹茶席、箏曲、吟詠など各種の催しもされる。この催しの翌日から一般の通り抜けが七日間行はれる。特別観桜会は身体の不自由な方々を招くもので、車椅子などで来る人も多く見られる。

### 車椅子寄せて桜の幹撫づる
### かかる名句を寄せられてもいる。

この造幣局には文化部会があり、その中に俳句教室も設けられ、「花の通り抜け」の句も公募し、投句函を設置して短冊と筆記用具も備へてあり、毎年多数の方々の花の句が投入されるのである。こうした事はいつ頃からの催しか知らないが、すでに歴史は古く、第一代の選者は、長谷川素逝先生、次いで田村木国先生、山田千城先生と続き今は第四代目と成っている。

毎年この催しの句の中から選者が選んだ句の、特選、秀逸、佳作などの句を短冊に認められて、翌年の「通り抜け」に桜の樹のそれぞれに吊されるのが例である。

### 後戻り許さぬマイク花の道

まさにこの句の通りここだけは一方交通で後へは戻れない。天満橋北詰の入口を導入り、北へ北へと歩むため、ついうっかりと投句函を見逃がす人もあり、また一度遠巡りして入口へ戻り投句する熱心な方も居られる。一週間に百万人近い人達が両側の桜の珍しいのを賞め讃え、吊された句短冊を書き写す人などもあり、夜の雪洞が川の面に映え、遠くに大阪城が見える等、確かに花の名所と思われる。

### 日に映ゆる花老醜の翳有たず
### 諍ひて来て花の灯に鎮もれり
### 恪勤の靴音花の門に入る

ここの桜樹には数人の花守さんが居て何時も手入が行はれているため、汚れた幹など一樹も無い。未知の方々には是非一度は見て欲しい水都大阪の花の名所ではある。

☆　☆　☆

## 花見酒
### ＋鎌倉の桜＋

清水　基吉

私は酔っぱらいだから桜の花が大好きである。別に酒飲みでなくても、桜の好きな人はたくさんいるだろうが、酔っぱらいに一番ふさわしい花は桜であって、一年の間、特に風情もなく、大きな図体をさらしていた枯木が一朝、「それ見ろ」と言わんばかりにパッと咲いて、やがてパッと散ってしまう。桜にしても、せいぜい酒でも飲んで浮かれてほしいだろうと思う。

終戦の年に鎌倉に引っ越してきた時は、私の酒量もパッと開花したところであって、焼野原となった東京と違い、鎌倉には桜が残っていたから、以来、毎年のように花見酒をつづけて今日に至っている。

遠い昔のことはさておき、この原稿を書くために、ここ三年間の手帖を見たら、年によって開花の遅速がある。

まず五十一年。「三月二十八日開花。大船砂押川の夜桜を見る。三十一日建長寺半僧坊花見。四月三日鎌倉山花の雨。四日材木座光明寺花の句会。七日東京上野花見。八日極楽寺。十日七里ケ浜（句会）。十一日八幡宮句会の道すがら段鳶の花を見る」というぐあいで、この年は四月二十三日になって円覚寺・建長寺・葛原ケ岡・大船松竹撮影所と、これは八重桜を見て回っている。

五十二年には三月二十六日、鎌倉山に満開の桜を見て長谷の句会に出ているが、昨年は四月七日になっても鎌倉湖畔の「桜未だし」で、花は十日に開いた。例によって建長寺半僧坊の「おせい茶屋」で花見酒。山内に「万書」同人の長安節君が住んでいるので「すぐそこに君の家あり花見酒」の句を酔っぱらって書き、その色紙を土産に同君の家でまた酒を飲んでいる。

鎌倉には至るところに桜があるが、別にどこそこの花が見どころだというわけではない。高遠の桜のような名木というものもない。ただ、私にはお目当ての桜が数本あって、それは川っぷちだの、ホームから眺められたり、百姓家の庭だのにあって、毎年、花開けば「よくぞ咲いてくれた」と涙ぐましくなり、酒を飲まずにはいられぬのである。

数年前、鎌倉では市花として山桜を選んだが、市の観光課では私に山桜のPR文を書けと言ってきたのであった。遠山に見る一本の山桜の風情も捨てがたい。よろこんで一文を認めたら、市では稿料代りに一樹の山桜を私の家の庭に植えてくれた。

わが家の山桜も大樹となって、ことしも花開くことである。然し、花見酒はひとりじゃつまらない。俳句仲間を誘って、ことしも鎌倉中の桜を追って、私は酔っぱらってることだろう。

☆　☆　☆

## 岩手の桜

田村　了咲

桜前線が県都盛岡を通過するのは四月二十九日天皇誕生日の前後である。岩手県には県外にひびきわたるような名だたる花の名所などはないが、半歳近くも雪にとざされて、ようやく春の陽光を浴びることのできた歓びで、どこの山野も花人でにぎわう。

### みちのくの花は色濃く覚ゆなり

この句は師青邨の旧作、旅人として古里をおとずれた折の挨拶の句である。みちのくの桜は確かに色が濃い。これは言うまでもなく岩手の桜の特徴の一つといえるかと思う。もっとも盛岡地方裁判所の内庭にある石割桜はシロヒガンザクラだから真っ白い。この桜の樹齢は約三百年、根まわり二㍍もある巨石の割れ目に根をすえた天然記念物である。これは冬間、雪吊をしたり、支柱を立てたりして大切に保護されている。

### 梅桜かさなり咲ける草屋かな

昭和の初期まで盛岡に住んでいたホトトギスの古い俳人、小納迷人の句である。一度に春がきて梅も桜もあわてて一緒に咲いたという写生の句だが、よく地方色をあらわしている。盛岡城址岩手公園には小規模ながら、梅林も桜ばやしもあるが、いまでもこんな光景がながめられる。

県南では一関市の釣山公園、平泉の中尊寺、北上市の天勝地それに盛岡市の高松の池など岩手の花の名勝地というところであろう。一関あたりではしだれ桜も点在する。

しだれ桜といえば盛岡市愛宕町の俳聞家でもある青邨旧居の前庭にも市指定の紅しだれの名木がある。よくわれわれ仲間の句材になっている。

変った桜といえば岩手には十月桜というのがある。旧の十月、つまりいまの十一月と春季と二度も咲く小木である。白々と小花を沢山つけるからあわれである。

この花は盛岡市内の神社仏閣に多い。原敬の菩提所大慈寺の墓の入口にも毎年咲き、またこの辺りの寺にも見受けられる。初めのうちは帰り花だと思って、知らずに詠んでいた。

平泉の花は金色堂を背景に美化風韻の適地、北上の天勝地は北上川と和賀川の合流点の景観美に支えられている。いずれ花時はどこもかしこも人込みで大変である。

このごろ町中の桜も屋敷の桜もめっきり減って寂しくなった。毎春花見がてらの吟行をするが、場所の選定に腐心している。

また盛岡の話にもどるが、郊外の山あいに上来内という小さな駅がある。そのすぐ近くに市の水道浄水場があり、浄池の奥の広場に二十本ばかりかたまって紅しだれが咲く。余り人に知られていない静かなところだ。昨春はここに遊んだ。二、三組の家族がいただけだった。以前にも一、二度来たことがあるが、花には早かったり、散ったあとだったりして花見にならなかった。二度目の時、駅長さんにこのことを話したら「駅に電話をかけて花の模様をきいてからおいでなさい」といった。

をとこあり浄水池守り花を守り

山公園に移植した。これが現在の本関雪画伯によって植えられた関手過ぎて不釣合のように思われのある春の曙。朝の四時半か五時


奥の細道

芭蕉の足跡を偲び　郷土史家とたどる　4泊5日の春の旅

エース

不朽の紀行文「おくのほそ道」は、芭蕉46才の春から秋にかけて、日数百五十日、旅程六百里に及ぶ旅の記。その語りかけは旅への心をいざなうものです。その足跡をたどりながら芭蕉を偲んでみようというのがこのコースです。

旅行賃用　4泊5日／往路貸切バス・復路特急指定席利用（1名様）
おとな　85,800円
（おとなのみの取扱いとなります。）

出発日　5月9日(水)・16日(水)・23日(水)・30日(水)
6月6日(水)

募集人員　各回40名（催行最少人員15名）

集合場所　浜松町バスターミナル8時30分

食事　第1日目昼食から第5日目昼食まで含みます。

贈呈品　行程表・記念写真（カラー1枚）・ガイドブック（〝奥の細道〟道しるべ）

コース
1日目　浜松町（9時00分）発＝岩槻＝黒羽＝大雄寺＝雲巌寺＝芦野遊行柳＝那須温泉神社……殺生石＝那須温泉
宿泊＝ホテル一望閣（和室）
2日目　＝白河関＝飯坂温泉＝医王寺＝塩釜神社＝塩釜〜〜

# さくら・ずいひつ

## 京都の桜

那須　乙郎

私は京都に棲みついて五十余年経つ。いくつかの桜の思い出があるが最も印象にのこっているのは、なんと言っても円山公園の祇園の夜桜であろう。いまの二世桜でなく一世桜の方である。昭和四年に京都に遊学した私は、岡崎に下宿していて、散歩のコースと言えば平安神宮、知恩院、円山公園そして四条通へ出たものだ。弊衣破帽の学生たちは、時に校歌をうそぶきながら、この夜桜を眺めて青春を謳歌し、多感な血潮をたかぶらしたものだった。

ところが戦時中肥料が与えられずまた樹齢の高いこともあって、戦争終焉と同時に惜しくも枯れてしまった。だらりの帯の舞妓のあでやかさにも似たこの枝垂桜は、まさに京都のシンボルであっただけに、この名木の枯死は市民に大きな衝撃を与えずにはおかなかった。この悲しみを知った嵯峨の造園士佐野藤右衛門氏は、自園に実生により同種の枝垂桜を育て、円山公園に移植した。これが現在の二世桜である。すでに三十年の歳月が流れている。しかし、今では立派に成長して幹も太り、丈も一世桜に劣らぬまでに伸びて、その若々しい枝を大空に拡げて、妖艶さをふりまいている。やはり京都を代表する桜と言えば、この枝垂桜であろう。

千年の歴史をもつ古都京都には、桜の名木はいたる所にある。まず京都御所紫宸殿前にある左近の桜、中立売御門を入った御苑の一角にある車返しの桜。洛北へ行けば、鞍馬に出てくる鞍馬の雲珠（うず）桜。大原の寂光院前庭にある汀（みぎわ）の桜。上加茂の馬場にある枝垂桜は樹齢を重ねていよいよ麗しい。また、銀閣寺から若王子にかけて疎水べりに、橋本関雪画伯によって植えられた関雪桜も名所の一つとして訪ねる人は絶えない。豊臣秀吉によって、歴史に彩られた醍醐の花見は、今も祭として伝えられているが、この三宝院の枝垂桜も名木として恥じない豪華な桜だ。

西山方面に歩を運べば、花の寺には西行ゆかりの西行桜があった。祇園の枝垂桜よりも、色が淡く、花弁はうすく、薫り高い枝垂桜であったが、先年枯れて今では色あでやかな紅枝垂桜がそのあとに植えられている。この桜は色、形から察して平安神宮のものと同種類のように見受けられる。平安神宮のように社殿楼閣の絢爛たるところでは、この紅枝垂桜はいかにもふさわしいが、花の寺のような寂びれた山寺では、いささか派手過ぎて不釣合のように思われる。南北朝の悲史で彩られた山国陵の常照皇寺の桜は、歴史の重みも加わってひとしお麗しい名木である。

私の住んでいる北野の近くには平野神社や御室寺の桜の名所がある。前者は種類が多く、枝垂桜、普賢象桜、をはじめ墨桜もあって、花時の喧騒には全く辟易する。後者の御室もまた酔客であふれるばかり。ただここの桜は地上からすぐ枝分れして低木のままに咲くことと、花期がうんと遅れて四月下旬に咲くので有名である。

いま私に、今まで見た桜のうちで最も美しかった桜は？と尋ねられたら、躊躇することなく広沢池の桜と答えたい。戦時中のことであった。嵯峨に疎開していた頃のある春の曙。朝の四時半か五時頃か。あたり一面霧が立ち込めていた。その霧の高さは三、四メートル位で一線を劃してその上は青空。池の向う側の遍照寺山が、あたかも島のように浮いていた。池の東岸の数十本の山桜は霧の中から枝を池にさしのべていた。私は夢か幻かと思いながら、この桜の美しさに立ちすくんでしまった。あれから三十数年の年月が流れたが、あの神々しいまでに美しかった桜は、私の全生涯の桜であり、眼底に焼きついて離れない。

一般に水のある風景の中の桜は特に美しく見える。大覚寺池畔の後水尾桜、嵐山の山桜などまさにその感をふかめる。さて、今年は何処の桜を訪ねようか。

## 高遠の桜

皆川　盤水

雪嶺の冷たさいつも桜の上

この句は先年、細見綾子さんが高遠で詠んだ句である。雪嶺の冷たさという表現はまさしく山国、高遠の桜の真髄をとらえて動かない。

私は桜の咲く頃になると、いつも故郷みちのくの桜を思いだすのであるが、先年遊んだこの伊那谷の高遠の桜の見事さにも、親しく憧れをもつ様になっている。

高遠は信州伊那谷の小さな城下町である。

高遠は初め、諏訪大社の上社諏訪頼継の子信員がこの地に住んでから、諏訪系高遠氏の根拠地となり、近世は武田信玄の三河の徳川攻めの基地、また、徳川時代に入ってからは伊那と甲州を結ぶ商業の町として栄え、古くからさまざまな史実に富んだ町であるが、いまはひっそりとさびれた山国の小さな城下町である。

この町は、周囲が山また山、山が重なりあっている。東は南アルプスの仙丈ケ岳（三、〇三三㍍）につづき、西は中央アルプスの木曽駒へとつらなってゆく山の町でもある。

有名な高遠の桜はこの城址の本丸を中心に四月半ばより咲き初める。築城は武田信玄麾下の謀将山本勘助、東に月蔵山と呼ぶ山を背負い、仙丈ケ岳を源とする三峯川が南西に流れ、北に藤沢川という激流をのぞむ断崖の上に、本丸を中心に深い空濠をめぐらした天然の要害をなす台地にたてられた城である。

さて、全国に桜の名所は多いが城址の桜の名所となると、そう数多くはない。みちのくなら弘前の桜、会津の桜などであろう。私の偏見かも知れないが、私は山国に育ったので平地の桜にはあまり興味がない。それに較べて、山のある城址の桜には、平地にない景観が周囲に充足していて俗に徹しない格調があるので興味を惹かれる。

高遠城の桜は小彼岸桜、これは植物事典によると、江戸彼岸桜とマメ桜の雑種ということだが、普通の桜より紅色が濃く艶麗さがある。

武田信玄の五男仁科五郎盛信が、織田、徳川の大軍に敗れ、一族凄絶な打死にをしたとき、この城山を血に染めたので、土地の人は血染めの桜ともよんでいるといわれている。例年四月の半ばが満開で見頃だが、二、三日前、高遠の役場に電話をすると、今年は暖冬で四月の初めには咲きだすだろうということであった。

さて、この桜が咲いている時期には必ず小雪が舞う冷たい日があるということだ。これは山国だからであろう。亡くなった石川桂郎氏は、この桜の季節に高遠を訪れて、雪と桜にあい、風邪をひきこの町のわびしい馬肉屋兼旅籠屋に三日三晩寝込んで、毎日馬肉を食っていたという話がある。馬肉もここは名物。

この町の蓮華寺は徳川時代の大奥の女中絵島の墓のある古刹、寺の裏径の絵島の墓近くにも大きな桜の古木があった。絵島が高遠に流人として心楽しまなかったのは二十八年間。

斉藤茂吉の「山峡日記」（大正一五年一二月）に

「墓はあはれに小さいもので、そのあたりから水が湧いて流れていて、それは落葉に埋まってるた」

という文章があるが、これはこの桜の落葉であったろう。

夕桜澄むべく澄みて岳の雪
雪光って仙丈岳暮るゝ桜かな

は、先年高遠に旅をして詠んだ、「曲水」の河合未光さんの句である。

☆

## 花の道行き

細見　綾子

去年の春、吉野のさくらを見た。吉野の桜は前にも、二度ほど見に行ったことがあるがもう大分記憶がうすれてしまっていて、はじめて行くようにたのしみにしていた。関西の人々との約束で、四月十七日頃が盛りだろうということだったが行って見るとまだ五分咲きというところ。でもその頃が一番いい時であるかもしれない。

京都から奈良電で吉野口まで二時間以上かかる。この時間が長いので吉野はおっくうだ、という点もある。しかしこの二時間は少しも退屈しなかった。沿線の風景がおもしろいからである。次第に山深くなって行くので、段々の田んぼが多いが、苗代があったり、鳥おどしが光っていたりする。れんげ田も多かった。濃いれんげ田が幾枚もつづいていたりするのはなんとも懐しい。五月の節句が近いので鯉のぼりが立っていた。みどりの風に鯉のぼりがひるがえる。まさにそのとおりである。

吉野口からケーブルで花の山をのぼる。

五分咲きだというが花見客は雑踏していた。牛の背中のような尾根の町はずっと昔来た時とあまり変っていない。

蔵王堂をはじめとしてその日のうちに大分歩いた。谷を下りたり上ったりで自動車は禁止だということで、歩きくたびれた。歩き疲れて花を満喫することになろうか。吉野は山桜が大部分である。山桜の美しさをあらためて知ったと思う。一重咲きの淡白な花が咲く時すでに葉が出ている。赤茶色の若葉の色がよい。

夕日をあびながら谷深く散ってゆく。谷が深いので、散ってゆく距離がすこぶる長い。

夕日にきらきらと舞いつつ落ちて行くのを見た時、吉野のよさはここか、と思った。散って行く花の道行き、山桜は散りやすく、道行きを演するのに最も適している。

花は、特に吉野の桜は、この道行きが美しいのだと知った。

☆

### 『自註現代俳句シリーズ』より抜粋

**第一期『岸風三楼集』より**　昭和一五年作

壬生狂言うなづき合うて別れけり

現在は観客席も立派な鉄筋建となっているが、当時は掘立小屋みたいで野趣深いものがあった。「壬生念仏子供ら柱のぼるあり」同時作。

**第二期『下村梅子集』より**　昭和四二年作

どんたくを人形店に避けて見る

大体、博多っ子は陽気である。黒田武士の福岡とはちがう。戦後、町の様子がまるで変ってしまったが、博多人形は健在である。

**同『亀井糸游集』より**　昭和三四年作

山畑に吉野人帰し花終る

山畑に又人を見るようになった。これまで花見客に町村をあげてかかわっていた吉野の人達が花の終りと共に取戻した静かさ。

**同『堀口星眠集』より**　昭和四九年作

山下る復活祭の蟇の列

碓氷峠、旧中仙道を坂本に下る。蟇の列が、次から次へと、山から沢へ下ってゆくのに出合う。復活祭の日であった。

**同『中山純子集』より**　昭和五一年作

八十八夜水音を聞き惚れもして

四季のいつが好き、と問われれば即座に八十八夜の頃とこたえる。己が水仕の音さえ、こころよい律を奏でてくれる。

**第一期『山口青邨集』より**　昭和一二年作

たんぽぽや長江濁るとこしなへ

宝山城は古い城市、城外には揚子江が海のようにひろがり水は濁っていた。堤防に立った、蒲公英が咲いていた。百年河清を待つという言葉。

# 俳句カレンダー鑑賞

## 〈四月〉

### 山又山山桜また山ざくら

阿波野青畝

この句は句集『甲子園』に収録のもの、昭和三十一年南紀遊旅の時の作である。また青畝筆墨集『春の月』にも載っており、ともに

山又山山桜又山桜

で漢字ばかりでまとめられている。カレンダーのかな文字まじりの気分や字くばりの都合上でかな文字をまじえたものとのこと。

『春の月』の作品解説で青畝先生は次のようにのべておられる。

「動詞がなく全部が漢字でぶあいそうな句形をなす。折り重る幾多の山々とそこに咲く山桜の白さがちりばめられた風景は吉野から熊野へかけての俯瞰である。イメージが卒直に浮ぶなら説明の要はない」と。

先生は動詞がないと言われたが形容詞もない。ただ「又」という接続詞が二度使われているのみであとは全部名詞である。もう一つ驚くことがある。それは気にならないが第一句目は字余りだから十八字になる。その十八字の母音の十六字までが「ア」であって僅かに二字の母音が「ウ」である。

アアアアアアアアアアアアアアアアアウアア
ヤママタヤマヤマヤマザクラマタヤマ

先生の書には、書家の書とちがった風格があり、有るがままを無心に書いておられるようである。そこにはてらいもなく、豊かな人間味が表われていると私は思う。

俳句も書も、つまるところ人間ということになると思うのである。

（下村　梅子）

# 季節の窓

## 奥鬼無里

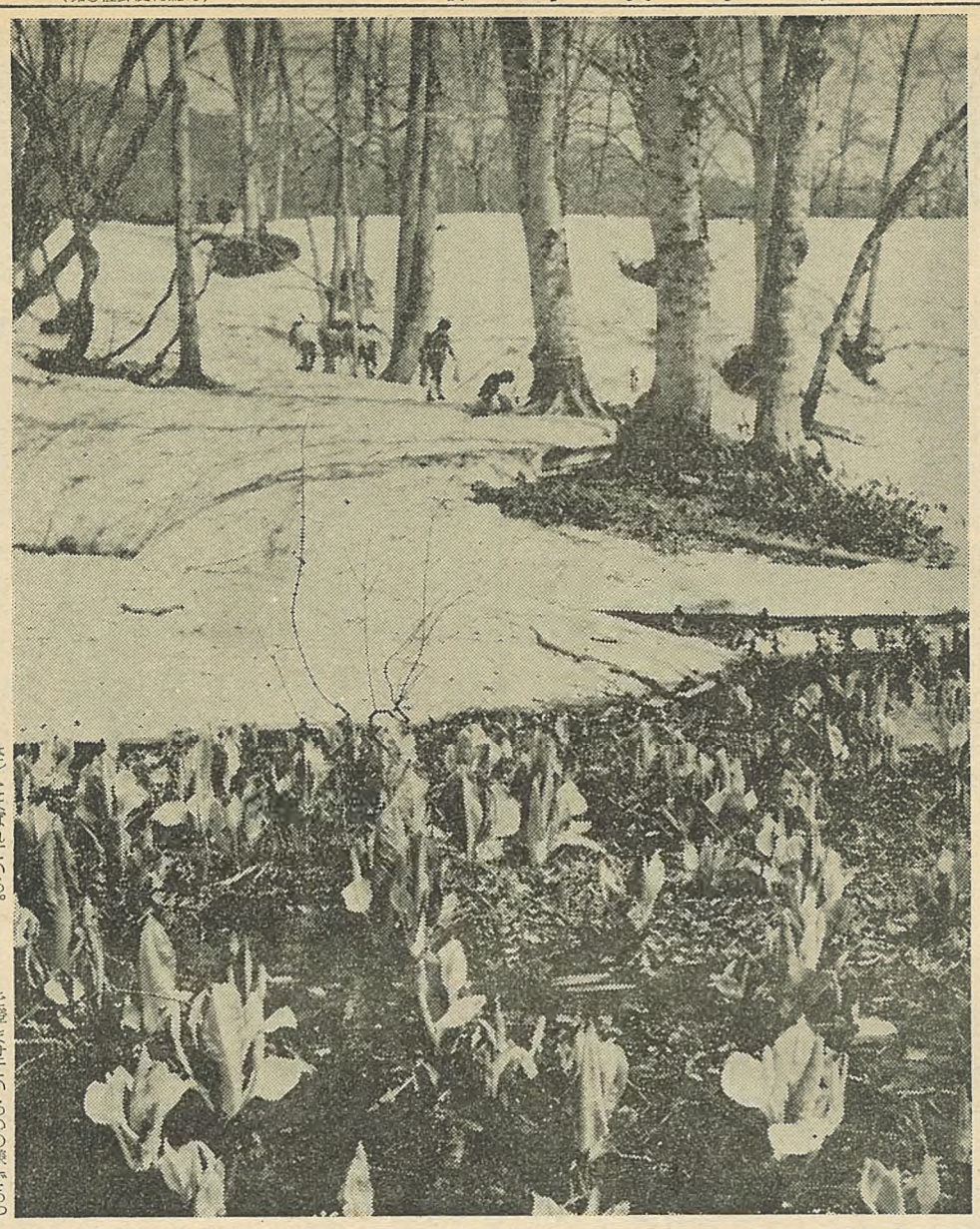
善光寺平を西から南へ流れて、犀川へ入る裾花川のみなもとは戸隠の裏谷である。この辺りは謡曲紅葉狩で知られる鬼女伝説に因んで、鬼無里（きなさ）とよばれている。

奥裾花の谷は、丁度あかるい木ぶしの花の盛りであった。ぶなの原生林を往くと、残雪に覆われた起伏のそこここに雪解水がとうとうと鳴って、目覚めたばかりの水芭蕉が、萌えそめた高枝に戯れる小鳥達の声に、耳を澄ませているかの様であった。山椒魚、森おおがえるの棲む吉池はやっと雪解をはじめたばかりである。

ひと辭にひとつの雪間囀れり

望月たかし

（文・写真　小林　碧郎）



# 東京地区講師の連絡会議

## 本年初の年の花委員会

本年の第一回年の花委員会は、三月二十日正午から俳人協会で開催され皆吉委員長、大場、甲賀、松崎、井桁、遠藤、和田の各委員それに八王子老人俳句講座担当の宇山雁茸氏が臨時出席した。

議事は本年度事業計画を討議、東京地区講師の連絡会議を開くことを決定、甲賀山村委員に実行委員長を委嘱した。連絡会議は五月末または六月に開き、各講師から福祉施設慰問の実情を説明、問題点を討議することになっている。

また、例年の誌上大会は九月十二日開催することに決まった。

# 両丹地区俳句大会

## 4月に舞鶴で開催

京都府北部の丹後地区の俳人協会員が中心となって、両丹地区俳句大会を開催する運びとなった。

日時は四月十五日（日）午前十一時受付、午後零時三十分開会。

場所は舞鶴市余上部、舞鶴市中央公民館で、本部派遣講師は宮津昭彦、辻田克巳の両氏である。

詳細は代表幹事猿橋統流子氏（電話〇七七三―七六―〇〇九六）にご照会願いたい。

# 勝又氏が上京し打ち合わせ

## 北海道懇親俳句大会迫る

五月二十六日に札幌で開催の北海道懇親俳句大会が間近に迫ったので、勝又木風雨氏は三月二十四日上京、俳人協会本部を訪問、詳細な打ち合わせを行なった。

勝又氏談

「北海道では初めての試みだけに成功して欲しいと思います。なに分にも北海道は広いので、札幌中心の行事となるのも止むを得ませんでした。また時間の都合上、事前投句として、大会では沢木、野沢両先生からゆっくりお話を願うつもりです。宮下事務局長もおいでになるので、北海道俳壇の事情をよく理解していただくつもりです。」

# 文芸美術健康保険組合加入をおすすめ

俳人協会会員は文芸美術健康保険組合に加入出来ます。この健康保険組合は文芸家協会をはじめ、文芸、美術の団体が集って組織した健康保険組合で、理事長は丹羽文雄さんです。

保険料は本人が月額五、〇〇〇円家族は三、〇〇〇円です。従って現在、市町村の国民健康保険に加入している人で、右よりも高額の保険料をお支払いの人は、文芸美術健康保険をご利用なさった方が有利になります。詳しくは当協会事務局健康保険係にご照会下さい。

# 会費払い込みについてのお願い

すでに会員諸氏のお手許に会費払込みのお願いが届いていることと存じますが（年八千円）、なるべく早く、お払込み下さるようお願いします。（四月末日まで）

また、昨年より金十五万円を払い込めば、終身、会員払込みを要しないという制度も出来ました。詳しくは事務局にお問い合わせ下さい。

昭和五十四年四月

社団法人　俳人協会
事務局会費係

# ギャラリー　たより

## 黒田桜の園・水墨展

とき　四月二六日～五月一日
ところ　大阪天満橋
松坂屋百貨店美術サロン
（後援　馬酔木蕪巣会・馬酔木）

# 編集室から

▽…わたくしは富安風生先生の色紙を一枚愛蔵している。「まさをなる空よりしだれざくらかな」の、句である。この色紙をいただくにはいささかのいきさつがあった。戦前にわたくしの父が富安先生と句座をご一緒する機会があった。高浜虚子先生もご出席になり会場は鎌倉の香風園だったと聞いている。

その席上で、父が風生先生にお願いして書いていただいたのが、「しだれざくら」の句であった。しかし、その色紙はわたくしの家の戦災で焼亡してしまった。その後父も死んでしまい、そのことは忘れるともなく忘れていたが、俳句文学館建設が始まってから、わたくしも富安先生とお近付きになる機会を得た。そして、父が書いていただいた色紙を焼いてしまった話を申上げると、それでは書いてあげようと気軽に書いて下さった。親子二代の「しだれざくら」である。

▽…本号は増ページ。その三ページを富安先生追悼にした。また古賀まり子さんの墨筆集鑑賞および村山古郷さんの稀覯本の原稿は半年も以前に書いて下さったものを紙面の都合で今まで手許に止めてあったもの。謹んでご筆者にお詫びする。

お花見特集はいかがでしたろうか。今年は花が早いので、本号がお届け出来る四月初めは花盛りだろう。

（草）

悼

しだれざくら
しだれかねたる今年かな

時彦

# 第十八回　全国俳句大会御案内

俳人協会主催（朝日新聞社後援）の全国俳句大会は俳壇の主な結社が合同して、しかも全国的な規模で行なう俳句大会です。奮ってご応募願います。

◇募　集＝三句一組（雑詠・未発表のもの。二百字詰原稿用紙使用／何組にても可。

◇会　費＝一組につき千円（現金書留又は小為替）

◇締　切＝五月三十一日（当日消印有効）

◇送付先＝東京都新宿区百人町三―二八―一〇（〒160）
俳人協会「全国俳句大会」係あて。

◇選　者＝水原秋櫻子・阿波野青畝・山口青邨・山口誓子・中村草田男・阿部みどり女・中村汀女・星野立子・大野林火・安住　敦・石塚友二・有働　亨・遠藤梧逸・加倉井秋を・岸風三楼・岸田稚魚・木村蕪城・清崎敏郎・小林康治・香西照雄・沢木欣一・進藤一考・高木晴子・鷹羽狩行・千代田葛彦・野沢節子・能村登四郎・橋本鶏二・原　裕・平畑静塔・福田蓼汀・細見綾子・松崎鉄之介・皆吉爽雨・村山古郷　（順不同・一部交渉中）

◇発　表＝九月八日（土）
午後一時より、朝日新聞社東京本社（入場無料）

◇賞　＝入賞者には文部大臣奨励賞・俳人協会全国俳句大会賞・朝日新聞社賞・各選者の特選句には賞品。

◇講　演＝尾形仂・細見綾子

☆募集句は選者の一部で予選を行ない、大会終了後一ヵ月以内に応募者全員に入選作品集をお送りします。会費の受領証は発行いたしません。

☆なお、大会当日参会者より一句を募集、出席選者数名による選を行ない、特選句には賞を呈します。（投句〆切一時半・会費無料）

昭和五十四年三月

主催　社団法人　俳人協会
〒160　東京都新宿区百人町三―二八―一〇
俳句文学館内

後援　朝日新聞社

## 全国大会文部大臣奨励賞作品

第十四回全国大会（昭和五十年）
廃れたるものにステッキ西東忌　川崎　池田　秀水

第十五回全国大会（昭和五十一年）
はらからのひとつの蚊帳に帰省せり　岡山　小田登志男

第十六回全国大会（昭和五十二年）
千枚田一と畦も塗り余すなし　東京　谷口　秋郷

第十七回全国大会（昭和五十三年）
柚子買が来てゐる空の蒼さかな　日野　結城美津女